

公共図書館における「場としての図書館」の  
概念と実態

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2023年3月

河本 毬馨

## 概要

### 公共図書館における「場としての図書館」の概念と実態

20世紀後半から情報技術の急速な発展と共に図書館資料の電子化が進み、市民は次第に来館せずともインターネット経由で資料を閲覧できるようになった。そして、一部の研究者や図書館員らが物理的な図書館の消滅を主張し始めたことで、図書館における物理的な存在意義が学術上の重要な論点となっていった。これを背景に、建築学、文化地理学、社会学、政治学などの学術領域の研究者らが、「場としての図書館 (Library as Place)」という概念を用いながら物理的な場の機能や役割を多様な視点から論じた。「場としての図書館」とは、図書館の従来の役割である資料の所蔵のみならず、文化的イベントの開催や地域コミュニティの活性化など、地域社会における図書館の「場」に関するあらゆる要素を含んだ幅広い概念である。実際、先進諸国の自治体は、地域における図書館に対して人々の社会的孤立や人種間の偏見による社会的分断を解決する役割を期待している。このように、現代社会において図書館の物理的な場はますます重視されてきていることがわかる。

しかしながら、「場としての図書館」の概念は、議論が活発になったことによって視点が多様化し、その学際性から全体像を把握することが難しくなっていた。また先行研究では、2010年代前半までに、特定の図書館の場に関する調査や、「場としての図書館」のモデル化が行われてきたが、いずれも「場としての図書館」の機能や役割を示すには限定的であった。そこで本研究では、公共図書館における「場としての図書館」が示す機能と役割の全体像を解明することを目的とした。そしてこの目的を達成するために、3つの研究課題を設定した。具体的には、1)「場としての図書館」の機能や役割はどのような概念モデルとして示すことができるか、2)「場としての図書館」の機能や役割はどのように歴史的に変遷したか、3) 現代的な図書館では「場としての図書館」の機能や役割がどのように実践されているか、である。

本研究の本論は第一部：「場としての図書館」の概念モデルの構築、第二部：「場としての図書館」の機能と役割の実態、第三部：「場としての図書館」の機能と役割についての考察からなる三部構成となっている。第一部：「場としての図書館」の概念モデルの構築では、研究課題1に取り組んだ。まず、概念モデル構築の前提となる分析手法を検討した。質的内容分析は概念モデルの構成要素を抽出するための手法の一つである。質的内容分析には帰納的優位アプローチと演繹的優位アプローチがあるが、本研究では目的に合わせて解釈的な分析を行う必要があるため、帰納的優位アプローチが最も適した手法であると考えられた。しかし帰納的優位アプローチを用いた場合の質的内容分析のプロセスについては、これまでほとんど検討されていないことが課題であった。そこで著者は、この課題を解決するために、これまでに提案された主要な質的内容分析のプロセスと研究結果の信用性と妥当性に関する主要な文献を検討した上で、帰納的優位アプローチを用いる上でより適切な質的

内容分析の方法を考案した。具体的には、質的内容分析のプロセスや研究結果の質を保証する方法に関する主要な教科書、マニュアル、学術論文の文献調査を通して検討し、この研究に必要と考えられる要素を組み合わせ、シングルコーディングによる分析方法を考案した。分析のプロセスは、次の 11 ステップで構成された。すなわち、1)研究課題、目的の設定、2)分析対象となるテキストの収集、3)分析ユニットの決定、4)分析対象テキストへの部分的な帰納的コーディング、5)分析対象テキスト全体の頻出語分析、6)帰納的コーディングとテキスト内頻出語から仮のコーディングスキーマの作成、7)専門家、複数の研究者の確認を含めた仮のコーディングスキーマの検証、完成、8)分析対象テキスト全体に対してコーディングスキーマを基にコーディング、9)一定時間経過後、再コーディングし評価者内信頼性の算出、10)コーディングスキーマ最終版の確定、11)コードの抽象化を通じたカテゴリの形成、である。

次に、考案した方法に基づいて「場としての図書館」の概念モデルの構築をした。まず、質的内容分析の対象となる「場としての図書館」に関連する文献を ProQuest Central、Library、Information Science & Technology Abstracts (LISTA)、Library Literature & Information Science Index の 3 つのデータベースを用いて収集した。同時に収集した文献の引用文献からも芋づる式に収集することで合計 175 件を分析対象とした。質的内容分析は、MAXQDA というソフトウェアを用い、考案した質的内容分析のプロセスに従って「場としての図書館」の機能と役割に関連する記述に対してコードを付与した。最終的に計 2,966 件のコーディングを行い、これらを 106 件の最小コードに整理した上で類似するコードをグループ化することでサブ概念、概念、象徴的基盤へと昇華していった。結果として、「場としての図書館」の機能や役割を象徴する 3 つの象徴的基盤（英知、遺産、コミュニティ）、それらの象徴的基盤を支える 11 の概念（知性、創造性、新奇性、文化・歴史性、中立性、平等性、利用者の自律性、公共性、私的性、社会性、友好性）、そして 11 の各概念に付随する 30 のサブ概念（知的雰囲気、学習、教育、作業環境、創造的活動、創造性の向上、最先端、独特な物理的体験、保存、文化的活動、継承、中立的立場、多様性支援、すべての人々のための場、公平なサービス提供、平等な環境、利用、援助、生きるための能力の向上、公共の共有環境、信頼性、干渉されない環境、他者の存在を感じる場、社会活動、公共圏、社会関係資本の創出、ミーティングプレイス、親しみやすさ、開放性、休憩・休息）を導出し、「場としての図書館」の概念モデルを構築した。

第二部：「場としての図書館」の機能と役割の実態では、研究課題 2 と 3 に取り組んだ。まず、「場としての図書館」の概念モデルの構成要素である概念とサブ概念、象徴的基盤の変遷を明らかにするためコードの時系列分析と文献レビューを行った（研究課題 2）。時系列分析の結果、コーディング件数は 1960 年代（4 件）、1970 年代（21 件）、1980 年代（14 件）、1990 年代（242 件）、2000 年代（1,443 件）、2010 年代～2020 年（1,242 件）であり、1990 年代から「場としての図書館」の議論が活発化していることが分かった。その社会的背景には、デジタル社会の到来とこれによる人々の生活の変化、都市に住む人々の社会的孤

立の進行、消費主義の台頭による図書館へのビジネスモデルの参入などがあつた。また、出現する概念は時代を経て多様化していた。さらに「場としての図書館」の概念のうち＜創造性＞や＜友好性＞は、包含されるサブ概念が徐々に拡張していることも解明された。

次に、現代の「場としての図書館」の機能や役割の実践を明らかにするために文献調査とWeb調査を組み合わせた事例分析を行った（研究課題3）。分析対象の事例は、ノルウェーの図書館政策とオスロ市公共図書館（通称：ダイクマン）である。分析対象の期間はノルウェーで公共図書館法が全面改正された2014年以降であり、分析対象の資料はオンラインで入手可能なノルウェーの公共図書館法、公共図書館運営に関する記述がある政策文書、オスロ市による図書館計画書、ダイクマン年次報告書、ノルウェーの図書館業界誌『本と図書館（Bok og Bibliotek）』、ダイクマン図書館のホームページ、中央館・各分館のSNSとした。分析の視点として、研究課題1で構築した「場としての図書館」の概念モデルを用いた。事例分析の結果、ノルウェーおよびオスロ市公共図書館の政策と実践において、概念モデルのすべての概念と象徴的基盤に関する政策的記述と運営上での実践がみられた。特に、概念モデルの中でも概念＜利用者の自律性＞や＜社会性＞と象徴的基盤に関連し、市民への情報提供や教育・文化活動の普及とともに、地域社会における民主主義の醸成を掲げていた。具体的には、公共図書館は公共空間において市民のための独立かつ中立的なミーティングプレイスや議論・討議の場であることが重視されていた。

第三部：「場としての図書館」の機能と役割についての考察では、本研究で得られた結果を対象に総合的に考察した。本研究で構築した「場としての図書館」の概念モデルは、網羅的に収集した文献から構築したことにより、1960年代から現在までの「場としての図書館」の機能と役割の全体像が把握できるモデルとなった。また、過去の図書館消滅論では物理的な図書館は電子図書館との対立軸で論じられていたが、本研究で構築したモデルを通してみると、実際には物理的な「場」は電子的な「場」へのアクセスを保障する役割を持っていることが解明された。さらに、その概念モデルを基礎にして、電子的な「場としての図書館」からも物理的な「場」における多様な図書館体験へと導くという相互補完的な「場」の役割の発展可能性を展望することが可能であった。

また、図書館情報学の学術領域から概念モデルを構成するサブ概念と象徴的基盤を解釈し直すことで、図書館の「場」を1)空間、2)活動、3)知覚、4)理念/象徴、の4つの視点から記述した。「場」は地理学や社会学、政治学などの多様な学術領域の視点が混在した概念であるが、ここで記述した4つの視点は図書館情報学における「場」の議論に関する論点を整理する際、理論と実践の両面において理解を助けるものである。さらに、近年の「場としての図書館」の機能や役割への言及や現代的な公共図書館の事例分析を通して、21世紀の公共図書館の「場」は、格差などの社会的課題の解決や民主的な地域社会の構築に貢献することが期待されていた。その上で、今後、21世紀を通して図書館が地域社会における「場」としてさらに発展していくための要素として、1)私的/社会的/オープンな場の包含、2)文化

活動と課題解決のためのモノの提供、3)民主主義社会への貢献、の3つが挙げられると考察した。

本研究の限界として、1)分析対象を公共図書館に限定していること、2)対象文献として欧米の中でも特にアメリカの公共図書館を対象としたものや著者がアメリカの機関に所属している文献が多く収集されたこと、3)事例分析の対象をノルウェーおよびオスロ市公共図書館に限定していること、4)事例分析で観察調査などの利用実態調査は行っていないこと、が挙げられる。また、今後の展望として、1)図書館の設計や評価における「場としての図書館」の概念モデルの適用・応用、2)実際の図書館における民主主義的な場の整備・維持に関する研究、3)「電子的な場としての図書館」に焦点を当てた研究、4)「場としての図書館」の提供に関する他の施設との連携の可能性の模索、5)シングルコーディングによる質的内容分析方法の応用など、が挙げられる。

## Abstract

### The concept and practice of “Library as Place” in the public library

Since the second half of the 20th century, rapid development of information technology has led to digitalizing library materials. Currently, citizens can read materials via the Internet without visiting the library. As some researchers and librarians began to insist on disappearing physical libraries, the physical significance of libraries became an essential academic issue. Based on this background, researchers in academic fields such as architecture, cultural geography, sociology, and political sciences have discussed the roles and functions of physical library places from multiple perspectives, using the concept of “Library as Place.” The “Library as Place” is a broad concept that includes not only the traditional role of libraries in holding materials but also every element related to the “place” of libraries in the local community, such as holding cultural events and activating the local community. Municipalities in developed countries expect libraries in their communities to resolve people’s social isolation and division caused by racial prejudice. Thus, it is clear that physical libraries are becoming increasingly important in modern society.

However, the concept of “Library as Place” became far too complex to provide an understanding of the holistic picture because of multifaceted arguments from interdisciplinary perspectives. Previous studies have conducted surveys of specific library places and modeled “Library as Place” by the early 2010s, but all have shown limited roles and functions. Therefore, this study aimed to clarify the entire picture of the roles and functions of “Library as Place” in public libraries. The three research questions to accomplish this purpose were posed as follows: 1) What conceptual model can be presented for the roles and functions of the “Library as Place”? 2) How have the roles and functions of the “Library as Place” in public libraries changed over time? and 3) How are the function and role of the “Library as Place” practiced in modern libraries?

The main body of this study consists of three parts: Part I: Construction of a conceptual model of the “Library as Place,” Part II: The actual situation of roles and functions of the “Library as Place,” and Part III: A discussion of the roles and functions of the “Library as Place.” In the first part, RQ1 was addressed. First, the analytical method, which is a prerequisite for constructing the conceptual model, was considered. Qualitative content analysis is one of the methods used to extract components of a conceptual model. There is an inductive-dominant approach and a deductive-dominant approach in qualitative content analysis, and the inductive-dominant was considered a more appropriate method in this study. However, the process using the inductive-dominant approach has hardly been considered. Therefore, to solve this issue, I proposed a qualitative content analysis method for the inductive-dominant approach based on previous principal processes and discussions concerning the trustworthiness and validity of research results. Specifically, I reviewed textbooks,

manuals, and research articles regarding the main flow of qualitative content analysis and how to research quality could be ensured. Based on these results, I constructed the process by single coding. The proposed process consisted of the following 11 steps: 1) decide research questions and purposes, 2) collect texts for analysis, 3) determine the unit of analysis, 4) engage in partial inductive coding of the target text, 5) analyze frequent words found in the text, 6) use these frequent words and inductive coding to create a temporary coding schema, 7) collaborate with multiple experts or researchers to verify the temporary coding schema (completion of the temporary coding schema), 8) code the entire text based on the coding schema, 9) after a certain period, re-code the text based on the coding schema to calculate the intra-rater reliability, 10) confirm the final version of the coding schema, and 11) develop categories through code abstraction.

Next, the conceptual model of the “Library as Place” was created following the proposed method. First, target texts concerning the “Library as Place” were collected from three databases: ProQuest Central; Library, Information Science & Technology Abstracts (LISTA); and Library Literature & Information Science Index. Next, the citation and reference lists of the collected texts were checked and a total of 175 papers were shortlisted. Qualitative content analysis was conducted using MAXQDA software, and codes were assigned to descriptions related to the roles and functions of the “Library as Place,” according to the proposed qualitative content analysis process. The total number of codings were 2,966. I organized these into 106 minimal codes with repeated bottom-up grouping and created categories, sub-categories, and symbolic infrastructures. As a result, I identified three symbolic infrastructures (Wisdom, Heritage, and Community), 11 categories supported these symbolic infrastructures (Intelligence, Creativity, Novelty, Culture and History, Neutrality, Equality, Empowerment, Publicness, Privacy, Sociability, and Friendliness), and 30 sub-categories accompanying the 11 categories (Intellectual atmosphere, Learning, Education, Working environment, Creative activities, Improving creativity, Cutting edge, Unique physical experience, Preservation, Cultural activities, Inheritance, Neutral perspective, Supporting diversity, Places for everyone, Impartial service provision, Equal condition, Access, Assistance, Improving life skills, Public sharing environment, Trustworthiness, Environment without interference, Place to feel others, Social activities, Public sphere, Generating social capital, Meeting place, Familiarity, Openness, and Rest) were identified. I created the conceptual model of the “Library as Place” based on these categories.

In Part II, RQ2 and RQ3 were addressed. First, time-series analysis and literature review were conducted to investigate changes over time in the categories, sub-categories, and symbolic infrastructures of the “Library as Place” model (RQ2). As a result of the time-series analysis, the number of codings were: the 1960s (n = 4), 1970s (n = 21), 1980s (n = 14), 1990s (n = 242), 2000s (n = 1,443) and 2010s + 2020s (n = 1,242), and it was clarified that discussion of the “Library as Place” rapidly increased in the 1990s. Its social background included the arrival of the digital society and the changes in people's lives caused by this, the increasing social isolation of people living in cities, and

the entry of business models into libraries due to the rise of consumerism. The appearing categories had diversified over time. Furthermore, it was also clarified that the sub-categories of Creativity and Friendliness in the “Library as Place” model have been expanding gradually.

Next, a case analysis including literature and a Web survey was conducted to clarify the actual situation of roles and functions of the “Library as Place” in the modern society (RQ3). The target case was library strategies in Norway and public libraries in Oslo (commonly known as Deichman). The target period of analysis was since the amendment of the Public Libraries Act in 2014, and the target literature was the public library act in Norway; policy documents on public library management produced by the Norwegian government; library plans by Oslo Municipality; annual reports, home page, and social networking service by Deichman; and “Bok og bibliotek” as library industry journal in Norway (all of which are available online). The conceptual model of “Library as Place” created in RQ1 was used as the perspective of analysis. As a result of the case analysis, there were political statements and actual practices in library management concerning all categories and symbolic infrastructures of the conceptual model. Specifically, regarding Empowerment, Sociability, and Symbolic infrastructures, it held up fostering democracy in the community, information provision for citizens, and dissemination of education and cultural activities. For example, it was emphasized that public libraries should be independent and neutral meeting places for citizens and places for discussion and debate.

In Part III, I considered the results obtained from this study comprehensively. The conceptual model created in this study provided the entire picture of the roles and functions of “Libraries as Place” from the 1960s to the present, constructed by comprehensive literature. In addition, although physical libraries were discussed in opposition to electronic libraries in past theories of library extinction, it was clarified through the model created in this study that physical “places” actually have a role in guaranteeing access to electronic “places.” Furthermore, based on this conceptual model, it was possible to look ahead into the possibility of developing a mutually complementary “place” role that would lead from the electronic “Library as Place” to a variety of library experiences in physical “places” as well.

In addition, by reinterpreting the sub-categories and symbolic infrastructures that constitute the conceptual model from the academic field of library and information science, the “place” of the library was described from four perspectives: 1) space, 2) activity, 3) perception, and 4) ideology/symbol. Although “place” is a concept that incorporates perspectives from diverse academic disciplines such as geography, sociology, and political science, the four perspectives described here will assist in understanding both theory and practice when organizing issues related to the discussion of “place” in library and information science. Furthermore, with reference to the roles and functions of “Library as Place” in recent years and results of case analysis of a modern public library, it could be considered that the “places” of public libraries in the 21st century are expected to contribute to



solving social issues such as inequality and constructing democratic communities. Thereafter, it was considered that there are three elements for the further development of libraries as “places” in local communities throughout the 21st century: 1) inclusion of private/social/open places, 2) provision of cultural activities and goods for problem-solving, and 3) contribution to a democratic society.

Limitations of this study include: 1) the analysis was limited to public libraries, 2) many of the collected literature targeted public libraries in the U.S. or the authors were affiliated with U.S. institutions, 3) the case study analysis was limited to Norway and public libraries in Oslo, and 4) No observational or other surveys of actual usage were conducted in the case study. As for prospects for future research, 1) application of the “Library as Place” conceptual model in library design and evaluation, 2) research on the development and maintenance of democratic places in libraries, 3) research focusing on the “library as an electronic place,” 4) exploration of possibilities for collaboration with other institutions concerning the provision of “Library as Place,” and 5) application of single-coding qualitative content analysis methods.